

# 病理から同性婚へ

-日本における同性愛者が結ぶ関係の研究についての考察-

早稲田大学 志田哲之

## 1.目的

本報告の目的は、日本の社会学において、同性愛者の結ぶ関係についての研究を概観し、考察することにある。

いうまでもなく、欧米を中心とした地域においては、同性婚の制度化の是非は一国の政治を左右しかねない政治的議題となっており、近年に至っては、日本の新聞等のメディアが頻繁にこれを報じている。とはいえ、同性婚の議題が登場するまでは、必ずしも永続的なカップル単位の関係に収斂されないものとして理解されることが多かった。英語圏における過去の研究を見ても、コミュニティや友人を家族として表明する当事者などについて着目をし、異性愛家族とは異なる家族のあり方が論じられていた。

一方の日本における同性愛者が結ぶ関係についての研究論文は、古くは1970年代に家族問題や家族病理学の領域において確認できる。ここを起点に今日までの研究論文を対象としたい。

## 2.方法

日本の社会学において、同性愛者の結ぶ関係を扱った研究論文を時系列順に配置し、それぞれについて検討する。対象とする研究論文は主に学会誌や紀要、編著書に収録された論文とする。

## 3.結果

同性愛者の結ぶ関係についての研究論文は、古くは1970年代に家族社会学領域で認められる。この際、同性愛者が結ぶ関係として注目されたのは、いわゆる生殖家族であり、家族の機能を阻害する同性愛者であった。ここでは同性愛者同士が結ぶ関係は等閑視されていた。また家族社会学領域においては、1990年前後より、海外における「新しい家族」としての同性愛者のカップル、という紹介もされた。

一方、同性婚をめぐる議論を国内の研究者が行ったのは、2000年代初旬であった。ここでは海外の議論を検討が行われ、国内における調査研究が報告されるようになったのは、2010年前後のことである。そしてこれらの多くはカップル単位の同性愛者同士の関係に焦点があてられており、同性婚の議題が登場するまでの、必ずしも永続的なカップル単位関係に収斂されない関係等への言及はあまり行われていなかった。

## 4.結論

上記のような変化は、日本の社会学における同性愛への視点の変化を密接に関連していると考えられよう。また社会学領域における同性愛者の関係への注目は、1992年にGiddens A.の提起した「純粋な関係性」理念のヒントとなったことなどが上げられる。ところが今日この理念は、同性愛者の結ぶ関係への適用はむしろ困難に見えなくもない。報告においてはこの困難さについても考えていきたい。

## 5文献

Giddens A., 1992, *The transformation of intimacy : Sexuality, love and eroticism in modern societies*, Polity Press. (松尾精文,松川昭子訳,1995,『親密性の変容:近代社会におけるセクシュアリティ,愛情,エロティシズム』而立書房)